

それぞれの“生きる”に
寄り添う守谷市政へ。

立憲民主党

The Constitutional
Democratic Party of Japan

りっけん

守谷市議会議員選挙 公認候補



新人

小菅勝彦

こすげ
かつひこ

私は、38歳のときに自分が糖尿病であることを知りました。父も重い糖尿病患者でした。私の場合は、父ほど重篤でなく、仕事も外回りから内勤に変えてもらうことで以前と変わらず働き続けることができました。

その私の兄は、聴覚に障がいを持って生まれてきました。兄はとにかく明るく前向きな人です。時間がかかっても必要なことは人に伝えようと「努力」する人です。だから、兄は普通に“生きる”ことに人の何倍も「努力」をします。

小さいころ、友達と一緒に公園で遊んでいたとき、なかなか遊びのルールが分からない兄に、まわりの子たちが戸惑っている光景を見たことがあります。そんな中、一緒に遊びたいと一人明るく笑う兄の姿を見て、現実の「不公平さ」に胸が痛くなりました。

人はそれぞれ生まれながらにして持っているものが違います。お金に恵まれている人、丈夫な体の人、容姿に優れている人、様々です。私は糖尿病を抱え、兄は聴覚障がいを抱えて生きています。

そのために、人それぞれに、生きていくにあたって必要となる「努力」の量が違ってきます。そして、そんな「不公平な現実」を私は少しでも変えていかなくはないと思っています。生来、必要とされる努力の量、その凸凹を多少なりとも平らにするために欠かせないものがあります。それは、公共サービスです。しかし、残念ですが、まだまだその在り方は十分ではありません。

だから、「それぞれの“生きる”により添う守谷市政の実現。」に向けて、私は、兄に負けない明るく前向きな気持ちで、新たな世界へ挑戦します。

小菅勝彦事務所



070-3848-4638



〒302-0125 守谷市高野 5067-2

文化・芸術の振興と ボトムアップで 心豊かな守谷市へ。

文化・芸術の創造で実感する 「住み良い街」へ。

生まれ育った守谷市は、「住みよい街」(日経BP総研ビジネスパーソン)全国総合ランキングで、1位となり、大変評価が高いです。しかし、住んでいる住民としては、その実感が薄い。どこか物足りなさを感じてしまうのです。利便性も高い、環境も今は悪くない、都会からも近い、けれども、何かがたりない…。それは恐らく住み良いという、便利さとか数値だけでは測れない文化的な営みが少ないためではないでしょうか。

私自身は、音楽が好きで、常に音楽とともに生き

てきました。そのせいか、このまちにも文化的な創造を加えていきたいと思ってしまいます。東京に行かなくては音楽や演劇に触れられないというのはなく、日常にそういった潤いがあるまちにしたい。それが「住み良い街」という実感につながっていく。そして、上から作るのではなく、下から積み上げていくことが大切ではないでしょうか。守谷市政を、子供たちと一緒に、良い芸術や環境の大切さを育む地域へと舵を切りたいと思っています。



小菅 勝彦 こすげ かつひこ

プロフィール

●1964(S39)年11月、守谷市高野生まれ。●高野小、守谷中、県立取手一高卒業●市川音楽専門学校卒業。トランペットなどを専攻●事務機器販売会社に就職し約32年間勤務。●趣味はサックスを吹くことと、鹿島アントラーズを応援すること。その応援で出会った妻と、母、妹の4人で高野に在住。

それぞれの “生きる” に寄り添う守谷政策

✓ “協働のまちづくり”を前へ。 医療の地域交流の場をつくる。

情報不足から適切な治療機会が失われることを防ぐために、行政の支援のもとで患者や経験者が地域で交流する場をつくります。

✓ “プライマリ・ケア認証制度”で 普段から安心できる地域医療体制に。

高度で専門的な知見を有する看護師を支援する認証制度を創設し、住民一人ひとりの生活に寄り添う地域医療体制を整えます。

✓ 健康診断の受診率向上で 病への不安のない守谷市へ。

健康診断を活用できない市民のニーズに応え、より細やかな対応で受診率向上を目指します。

✓ “引きこもり相談支援課”の創設で 一人ひとりを支え合う守谷市へ。

社会問題化する引きこもりの問題を当事者とともに解決する「引きこもり相談支援課」の設置を目指します。

✓ “要配慮者”避難支援のさらなる深化で 災害への不安のない守谷市へ。

災害時に誰もが安心して避難できるよう、高齢者と障がい者の視点から福祉避難所の整備と避難計画の検証を進めます。